

### 可觀小説卷廿五

一、組頭・使番の役料

本藩組頭・使番兩役に、二百石・百五十石宛役料有之儀は、微妙公御代寛永年中初めて被定候て、足輕頭其外諸頭の役料は、松雲公御代に段々被仰付、江戸表には元來無之儀に候。保科肥後守正之公被仰上候は、賀州に役料と申儀有之、往古の職田に似申儀にて宜敷儀に候旨被仰候て、初て本知の高下に隨て其々被定候。其後嚴有公御代の末に、御役料の分不殘爲御加増被下之、致中絶候處常憲公御即位の後、再役料被仰付候。

一、瑞龍公の遺書

我瑞龍公の御遺書御國には令中絶候處に、山鹿甚五左衛門方に寫有之、有澤采女寫來候て上之候。

一、横山長知流浪中の夢想

慶長十九年の頃、横山城州長知流浪故ことの外困窮なりし。或夜の夢に左手に燭を乗り、右手に玉を握つて行く。然るに倒れて燭消え玉破れたり。覺めて後甚憂色あり。傍に浪

人ありて聞之、吉夢のよしを告げて即座に歌をよむ。

今迄のとほしき事を打捨て、君より祿を玉はりにけり

此年大坂陣起り越前鯖江にて被召出、再度三萬石を領す。

一、北川久兵衛高名の無功

北川元祖久兵衛大坂陣の時、藤堂高虎の陣へ微妙公より御使に罷越候。其先にて手に合敵首を獲候。御使相勤め、其首を携て本陣へ罷歸候。高虎被申候は、高名は仕候へ共無功にて、近頃惜敷儀と被申候。或人其意を問ければ被申けるは、久兵衛我等陣の着到へ其驗しを爲記罷歸、我等副使者相添へ賀州の陣へ遣し候はゞ、見事にも相見え、其功も最も顯るべし。惜敷事と被申候。

一、微妙公大坂御陣觸の次第

慶長十九年微妙公御家督御禮の由にて、駿府並江戸へ御越被遊歸御國の時、越中境に被成御座候處、其夜金澤年寄中より早飛脚到來、奥村攝津取次にて差上之申候。非常の飛脚と相見え各無心元存。攝津御次より罷出候と、取々何の御飛脚と相尋候へば、御陣觸と申候。其時分菊田今の逸角祖父逸角、御次詰にて相勤候故、御障子の透間より相窺候

處、公には只御獨御うつぶしね被遊、良久敷何やらん御思案被成、急に御起被遊御筆御取被成、一筆御調、是遣し候へと御意にて飛脚罷歸候。扱一日半に金澤へ御歸着、三日目に御出陣被成候。江戸より御陣觸は、東海道より金澤へ到來仕候。唯三日の用意にて諸士中御供に付、中々事調不申候。其段申上候得共御聞届不被成、松任より末靜に御行軍にて追々御供仕候。大津へ御着陣は、内府公より一日前に被成御座候。内府公御着の時は、宿端迄御迎に御出に付、言外御悦喜にて御同道被成、御旅館へ被爲入、御火燵に御向合に御あたり、扱々はやく事と被仰候旨。か様の趣、諸大名の内にては御一人の由申候。

一、三輪善藏が僧に贈りたる歌

松平紀伊守殿家來分三輪善藏と申儒者、久敷京に住候處、紀伊守殿老中に被成被申候節江戸へ罷越、只今は飯田町邊に罷在候。其人歌に僧に贈り申由。

法の花いつの春より咲そめてにほひを遠き世に残すらん  
是は表はあいさつにて、裏は遺臭千歳の意と見申候。

一、淺井源右衛門の江都紀行

わざとの日記めきてわろけれど、さにはあらず。事にあたりての覺書也。石筆なればわかちも見えがたし。けふは師走の八日吹とて北國の諺なれば、かねて心もとなかりしに、いとよくはれたり。風もふかず。房州昨夜江戸より小松參着とて、供なる者どもひき馬など敷もなく、黃鷹いくらもゆきあひたり。主は小松に逗留と申す。すぐに菊池大學旅宿に着きて物などくふ。野村與三兵衛・江守加兵衛・半田左京もうできて物語になる。江守角左衛門は持病おこり居てさかななどおくりぬ。暮におよび因州へゆきて、同道して登城せしむ。幸ひ便宜御尋の砌也。御書つかはさるべきのよし鴻廬館より申さる。御夜詰過ぐる直に笹田助次亭へより、又それより因州へ參て其夜は泊りぬ。

一、九日。雨折々音づれて、暖氣きさらぎに等し。けさは江守加兵衛にてめしたうべ野村・半田・菊池・市左也。角左も持病よし。晝詰に人なみく／＼にふくろや太兵衛とつれだちて出る。又御書の沙汰もなくて、晚には江守忠三郎茶の湯、菊池大學・江守加・半田左、某上座を無理にせよとて不及是非。御夜詰に又沙汰もなかりしが、何とかありけむ俄